

## 死をどうしたら受けとめられるのか⑤

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

## 死生学の誕生

「私」は「私の死」を受け入れられるのでしょうか。「私」は「あなたの死」を受けとめられるのでしょうか。これらは、私たち自身に直接的に起こることで、それが「交通事故死」「孤独死」「自死」など「理不尽」としかいえない場合であるなら、その受容により一層深い悲しみや苦しみや怒りが伴ってくるでしょう。一方、今までは考えられなかった状況によって「生と死」を考えなければならないことが起こってきています。生殖技術や臓器移植技術などに代表される科学技術の発展などに起因するものがその代表といえるかもしれません。また、日本のような先進国では病院での死が日常化した結果、「生（いのち）」が実感されにくくなっているようにも感じられます。

東京大学が立ち上げた「グローバルCOE『死生学の展開と組織化』」という研究で、その初代拠点リーダーを務めた島蘭進氏は、「現代の病院は死に往く人々のケアに多くの力をさかねばならぬ」と、1960年代から欧米ではホスピス運動が急速に広がり、死に直面した患者や家族のニーズに応えるための死生学の教育・研究が進められるようになり、同時期には、臓器移植、体外受精、遺伝子診断など生命倫理に関わる問題が噴出し、「医療臨床と医学研究の現場では日常的に死生観に基づく倫理的判断が問われるようになってきている」と指摘しています。そして、教育現場での死生観教育（デス・エデュケーション）への要望や子どもたちに「いのちの尊厳」について教えることを求める声があって、現代人が死に対する向き合い方を忘れ途方に暮れているのではないかと述べています。また、「死と生は表裏一体の関係にあり、生殖や誕生、病や老いといった人生の危機にどう向き合うかに関わる諸問題を考察するのも死生学の課題である」ので、「死生学はそもそも生命とは何かという生命観の問題、また、人間の生と死をどのように意味づけ理解するかという根本的な人間理解の問題を避けて通るわけにはいかない」（以上 <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/ja/gaiyou.htm> 参照、2012年3月8日）のです。つまり、「死」を考えていくことは「生」を考えていくことであって、「人間の生と死をどのように意味づけ理解するかという根本的な人間理解の問題」に向かわなければならないのです。

## 死生観教育（デス・エデュケーション）あるいは死への準備教育

シェーラーが指摘した「現代西ヨーロッパ人」の人間類型に現代日本人が属し、死を極端に抑圧してきたこととすれば、特に高度成長期以降の日本人は、「死」は「生」と対立するものとして、避けてきたといえるかもしれません。「現代西ヨーロッパ人」とは、仕事と金もうけを人生の目的とするという特徴があり、死をふくむ生の意味を問う哲学をもたないのですから（前号参照）。

日本では近年葬儀が簡略化されたり、儀礼そのものに対する現実的な不満があったりと、葬送儀礼そのものが問われたりしてきました。「葬式仏教」「葬式はいらない」というような文言をタイトルに持つ書籍が話題となったこともありました。そもそも「死者を生者はどう弔うのか」という葬送儀礼は人間独自

の行為であって、「死者はどこに行くのか」という問いへの答えでもあったはずで、そこに死者と生者の関わりも現出してくるでしょう。葬儀が軽んぜられるとすれば、死も死者も軽んぜられているように感じられます。昨年の東日本大震災以後、葬儀のもつ意義が復活し、死者を通して生者は「生きる」ことを学び直せる可能性が示されているようです。

さて、デス・エデュケーションは、日本では上智大学のアルフォンス・デーケン氏によって始められたとされています。1982年頃から「死への準備教育」を提唱し、各地で「生と死を考える会」ができました。デーケン氏は死の準備教育の必要性について述べています。

この世に生を享けた者にとって、死はだれにでもいつか必ず訪れる、普遍的・絶対的な現実である。死を前もって個人的に体験することはできないが、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚をもって自己と他者の死に備える心構えを習得することは、いま、あらゆる面でもっとも必要とされる教育といえよう。（『生と死の教育』シリーズ教育の挑戦、岩波書店、2001年、2頁）

そして、「死への準備教育」を「自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育」（同書、3～4頁）と定義づけました。また、健全な死生観を与え、死を知ることによって命の重みを理解し、生きる喜びと感謝の心を育むことができるといわれています。特に限られた命を宣告された人々へのケアに重点を置きましたが、教育の場でも注目されています。その社会的な背景には、前述したことも含め次のようなものが考えられています。

- ・病院死の増加
- ・現代医療特に延命治療に見られる人間（の尊厳）の阻害
- ・死の定義の曖昧化（脳死か心臓死）
- ・高齢人口の増加
- ・疾病の構造変化（癌などで長期的苦痛に苦しむ人の増加）
- ・10代の若者による酷い犯罪や、陰湿ないじめ、自殺等の多発、命の重みが忘れ去られている社会

学校で死の準備教育、あるいは「いのち」を学ぶ際の一般的な教育目標としては、

- ①生涯を通じて自分の死を準備し、自分だけのかげがえのない死をまっとうできるように死についてのより深い思索を促す
- ②時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価を促す
- ③死の芸術を積極的に習得させ、第3の人生を豊かなものとする
- ④個人的な死の哲学の探求
- ⑤宗教における様々な死の解釈を探る（生き甲斐・死に甲斐等）
- ⑥死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促すなどがあげられます。しかしながら、実際の授業でどのようなことを取り上げるか、どのようなカリキュラムを組むかということには、大いに工夫が必要だと思われます。